

7 学校における食育の推進の評価

(1) 評価の基本的な考え方

学校現場では評定と評価という言葉があります。評定というのは価値を定めます。一方、評価は価値付けをした上でその活動の改善のための情報収集をします。つまり改善するために評価を行います。食育も同様です。食育の評価は、食育の成果と課題を把握して、よりよい推進のための改善を図るために行うものです。

(2) 評価の実施方法

食育の評価は食育の推進がうまく行われているかという評価になります。これには大きく分けて二つの評価を行います。一つ目は成果指標(アウトカム)の評価があります。これは数値的に事前事後で見比べてできたかどうかを判断します。二つ目が活動指標(アウトプット)

図1 食育の推進に関する評価

＜食育の推進に対する評価＞	
①	子供や子供を取り巻く環境の変化の評価 ＝成果指標（アウトカム）の評価
②	活動（実施）状況の評価 ＝活動指標（アウトプット）の評価 両方とも次の食育計画の改善に必要

出典「令和2年度 食育指導者養成研修」資料
(文部科学省、令和2年12月)

の評価になります。これは目標に向けてどのくらい活動できたか、という評価になります。この成果指標と活動指標の両方を設定して、総合的な評価につなげることが重要となります。

まず、成果指標というのは、食に関する知識がどのくらい増えたかとか、あるいは食に関する意識がどのくらい変わったかということを見ます。それに対して活動指標は、給食の時間の食に関する指導や教科等の中での食に関する指導が何回ぐらいできたのかということの評価していきます。このように成果指標と活動指標の両方を行います。

表1 成果指標(例)

成果指標(例)	現状値	目標値	実績値	評価
配膳されたものを残さず食べられた子供の割合	60%	70%	75%	1(できた)
	1	2	3	4
実績値の評価基準	75%以上	70～75%	70～60%	60%以下

出典「令和2年度 食育指導者養成研修」資料 (文部科学省、令和2年12月)

成果指標においては、例えば表1のように、「配膳されたものを残さず食べられた子供の割合」とします。現状値が60%であったとすると学校で目標値を設定します。ここでは、目標値

を70%と決めます。そのあとに実績値の評価基準まで決めておきます。結果的にどうなったか、どの数値まで良しとし、逆にどの数値では良しとしないのかということを決めていくということです。そして実践を行います。実践を行った後に、実際に実績値が75%だったということであれば評価としては「できた」となります。

ただ食育の評価というものは、量的な評価とともに質的な評価も加味していくことがあります。

子どもの変化に関しては、数値で表すというのはなかなか難しいため、その質的な評価を加えとします。例えば、食育に「関心がある」と回答した子供の割合の目標値が70%で実績値が72%だったとします。数字だけを見ると「おおむねできた」となります。しかし子供たちが書いている内容を見ると、昨年度に比べて今年度は充実していた、大変食育に関係のある事柄が書かれてあったということであれば、評価は1の「できた」としてもよいとなります。つまりこれは量的な評価の中に質的な評価を入れるということになります。このような評価を学校評価等では行っていくこととなります。

もう一つの活動指標においては、具体的な活動指標例として、食育指導実施率や食育指導継続率などが挙げられています。

成果指標、活動指標の項目は、「食に関する指導の手引き－第二次改訂版－」P254、256、257に例示されています。

(3) 学校評価との関連

評価について考える上で重要なことがあります。それが学校評価です。学校評価の中に食育を位置付けるということが、食育に対する教職員の意識を高め、保護者や地域との連携を促進することにつながります。まずはその取組に関わった実施者による自己評価、教職員による評価を基本とし、必要に応じて「学校関係者評価」や「第三者評価」など、保護者や地域の方々、外部の専門家等にも協力を得ながら評価を行うということが大切です。

評価に関してまとめると、まず評価は改善のために行うものであることを理解することです。そのうえで計画の段階から評価することを考えて、目標を設定します。指標を設定することは評価を考えることにつながります。目標を設定した上で目標を達成するために実践を行っていきます。実践を行った後に評価をしますが、最も重要なのは整理分析をした後に、それを成果と課題としてまとめ、次年度に向けての改善に生かしていくことです。